

豊かになれない 日本を読み解く

休むために働くドイツ人、 働くために休む日本人

福田直子 著



PHP研究所
191ページ
本体価格 1200円

客が長蛇の列をなしているというのに、正午になったとたん昼の休憩で職員が席を立つ。

これらはほんの一例で、ドイツに滞在する勤勉な日本人は、開いた口がふさがらないようなこうした経験を日々繰り返している。悲しいかな、ドイツの高コスト労働やがんじがらめの規制などに加え、彼らの労働文化のギャップも日本企業にドイツ立地をためらわせる要因になっている。

本書を読み進めるうちに、はたとひざをたたいた。「ドイツ人はマルクス・エンゲルスの時代から、いかに自分たちの労働力を『売り』、その代償として社会保障や休みを増やすかについて知恵を絞ってきた。そう、ドイツ人と日本人は根本的に労働観が違うのだ。労働が「美德」であるわけがない。禁断の実を口にしたアダムとイブに神が与えた罰が「労働」だったのだから。

しかし、振り返って思う。真の豊かさを真に楽しむという意味では、やはりドイツの方が圧倒的

に正しいのだ。100年前の街並みを忠実に再現する古き良きものを尊ぶ風土、いつでも座れる公共交通機関、無駄を排した落ち着いた生活、広々とした住居、曾祖父の時代から受け継いだ家具調度、静かな夜の街。同じ敗戦国、

焦土の戦後から出発した日本とドイツなのに、なぜこんなに社会の様相も人々の暮らしも違うのか。本書は最終章で、パンク寸前のドイツの社会保障制度の現状を指摘し、働くために休んできた日本人に「休むために働く」ことを勧める。しかし、無駄だらけで落ち着きのない働きバチの国にドイツ的なゆつたりとした時間の流れを移植できるのか? 「できる。まずは unnecessary な夜のネオンをすべて消す。コンビニと自販機を廃止する。夜はゆつくり休むという共通認識をつくる」。後輩にこう提案したら、「そんなことされたら生活でさえない」と諭された。満員電車に携帯メール、雑踏と騒音。懐かしいベルリンの風景をふと思いつく今日このごろだ。(稲葉功)

日本人が抱く大いなる誤解の一つに、「ドイツ人は日本人と同様

勤勉を美德としている」という通説がある。ドイツ在住の女性ジャーナリストの手による本書は、こうした固定観念に冷水を浴びせ、「ドイツ人は怠け者」「ドイツ人はいい加減」と我々日本人に外国認識のオペルニクスの転換を迫る。

「じゃあ、真正直に働いているのは日本人だけなのか?」と自問自答する読者は、本書を読み進むうちに「本当の豊かさ」とは何かと

いうことを意識し始めるに違いない。

4年3カ月に及んだベルリン特派員時代を振り返ってまず思い起こすのは、ドイツ人の「仕事」に対する冷め切った感覚だ。例えばドイツ・テレコム。電話の工事に依頼すると、約束の時間に遅れる、作業員が去った後に電話をかけたら通じない、抗議すると追加工事が必要だからと追加料金を請求される。例えばドイツ鉄道。ダイヤの乱れは日常茶飯事、切符窓口で